論考（研究ノート）

「社会」という言葉を使って Society について考えるということ —柳父章の翻訳日本語論を手がかりに—

On Thinking of Society by Using the Japanese Concept of ‘Syakai.’
—Based on Akira Yanabu’s Discussion on Translated Words of Japanese.—

上　谷　香　陽*
Kayo Uetani

Abstract

This paper examines Akira Yanabu's discussion on translated words of Japanese. In so doing this paper argues that his discussion suggests some critical implications about the way of social construction of realities by using Japanese. In his consideration Yanabu regards language not only as representing realities but also as constructing realities in itself. And he poses the question about the disjuncture between the language for the world of thoughts and the language for the world of everyday in Japanese. While these translated words such as ‘syakai(society)’, ‘kozin(individual)’, ‘kindai(modern)’ are basic concepts for thoughts including sociology, they isolate from language for the everyday life world. These Japanese concepts aren’t used by people for constructing social realities of their everyday experiences. Based on Yabnabu’s discussion, this paper explicates how such a disjuncture has been organized in relation to the rapid modernization in Japan since Meiji period.

1　はじめに

本稿は、柳父章の翻訳日本語論を読解し、この論考が、社会的現実についての理解の仕方や、社会的現実についての知識の組織化のされ方の社会学的探究に対して、どのような問題を提起しているのかを考察するものである。

柳父の論考において言葉とは、単に現実を表象するだけでなく、それ自体現実を構成するものとして捉えられている。その上で、日本語において、思考の言葉と日常の言葉が断絶していることをめぐる問題が提起される。柳父は、日本語において、ものを考えるための言葉が、日常の言葉と切り離され、日常生活とは別のいわば「勉強部屋」の言葉になっていると指摘する。日常の言葉と切り離されている思考の言葉とは、例えば「社会」「個人」「近代」など、中学・高校の教科書や、新聞紙面などにも出てくるいわゆる学問・思想の—そして社会学の—基本用語のことである。柳父は、これらの言葉の意味が、どれほどの実感を伴って、私たち（日本語使用人）の日常生活を支え、動かしているだろうかと問い直す。そして、ものを考えるための言葉が日常の言葉と切り離されているという日本語使用の特徴を、明治以降の日本の急速な近

*　国際学部非常勤講師

代社会化の過程との関連において考察していくのである。

本稿では、翻訳語の成立事情をめぐる柳父の議論に依拠しながら、そこで指摘される思考の言葉と日常の言葉の断絶をめぐって、いかなる社会学的問題が設定可能かを検討するものである[(1)]。

2 「思考の言葉」の成立事情

日本語において学問・思想の基本用語が人々の日常の言葉と切り離されていることは、それら学問・思想の言葉が翻訳語であるということと関わっている。『翻訳語成立事情』（柳父 1982）で取り上げられるのは、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」「自然」「権利」「自由」「彼、彼女」という言葉である。これらの言葉のうち、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」は、幕末から明治時代にかけて、翻訳のために造られた新造語、あるいは実質的に新造語に等しい言葉であるという。「自然」「権（利）」「自由」「彼、彼女」は、日本語としての歴史を持ち、明治以前の日常語の中にも生きてきた言葉で、同時に翻訳語として新しい意味を与えられた言葉であるという。日本語には、幕末から明治時代にかけて、近代社会の知の枠組みにおける基本概念を、翻訳語として急速に受容してきた歴史がある。「中学・高校の教科書や、新聞紙面などにも出てくるいわゆる学問・思想の基本用語」は、成立してからせいぜい 150 年ほどしか経っていない、比較的新しい言葉なのである。

幕末から明治時代の学問・思想の言葉の翻訳は、西欧語から日本語へという一方通行であって、その逆はなかった。このことから、当時の近代世界システムにおける、「周辺」としての日本の立ち位置を見て取ることもできる。ただし、外来文化を熱心に受け入れること自体は、漢字受容以来の、もっと長い歴史があると柳父は言う。「上代以来千数百年、中国などの先進文化を、漢字という書きことばを通じて受け入れてきたという歴史的な背景（柳父 1982：36）」である。「私たちの国は、一貫して翻訳受け入れ国であった（柳父 1982：36）」のである。幕末から明治時代にかけて翻訳された言葉には、漢字二字の名詞形をとるものが多い。これは、西欧近代の学問・思想の言語構造が、名詞形の言葉を中心に組み立てられているためだが、それに加え、そもそも中国の学問・思想もまた名詞中心にできていたということがある（柳父 1982：118-9）。かつて中国の漢字の文化を熱心に受け入れてきたからこそ、同様のやり方で、近代以降、西欧語の学問・思想を比較的容易に受け入れることができたのだと柳父は指摘する。たしかに、「外来文化」としてやって来る学問・思想の言葉を使って言語活動できるのは、一部の特権身分に属する人に限られていたであろう。しかし、そのようにして学問・思想の言葉を日常の言葉と切り離して受容してきた「おかげで」、明治時代以降の日本の近代社会化に必要な知の枠組みをとにもかくにも急速に受け入れることができたと言えるのである。

『翻訳語成立事情』においては、日本語の「思考の言葉」のこのような成立事情に伴う、いくつかの「歪み」について考察される。それは、一言でいえば、「翻訳語に特有の効果によって、ことばの意味の分かりにくさや矛盾がかくされていて、人々に気づかれにくい（柳父 1982：iii）」ということである。詳細は以下で改めて考察するが、ここで指摘しておきたいのは、柳父の指摘する「翻訳語に特有の効果」とは、単に外国語を翻訳したという理由によってのみ生じるわけではないということだ。明治以降、西欧文明の学問・思想などを「受け入れることができた」と言われるが、それは主として、原語を参照しながらものを考えられるような一部の知識人の間のことであった。当時日本語に翻訳する必要のあった西欧語には、従来の封建的身分制に変わる新しいものの見方が含まれていた。このものの見方を理解することは、当時日

本の近代社会化を主導していた知識人たちにとっても簡単なことではなかった。『翻訳語成立事情』では、それら知識人たちが原語と、従来の日本語と、翻訳語のあいだで格闘する試行錯誤の過程が描かれている。

学校教育制度や印刷メディアの発展により、新しいものの見方を伴った新しい翻訳日本語は「流行」し、その言葉を使用する人のすそのも広がっていった。しかしながらそれは、必ずしも、翻訳語に託されたものの見方に対する理解が広がっていった、ということを意味するわけではなかった。柳父の論考が批判的に明らかにするのは、むしろ、翻訳語の意味の分かりにくさや矛盾が隠され、そのことに言葉を使用する当人も気づいていない、という事態が進行していく過程である[(2)]。今日、日本語使用人としての私たちは、「社会」や「個人」を日本語に元来存在する言葉として捉え、それらがsocietyやindividualの翻訳のために新しく造語された言葉であるとは思いもしない。それらの言葉は、実際、どのように使用されているのだろうか。私たちは「社会」や「個人」をとおして、societyやindividualというもともとの言葉に含まれているものの見方を、どのくらい理解しているだろうか。そもそも、「社会」や「個人」にはどのようなものの見方が含まれているのか、と問うてみることはあるのだろうか。

柳父が指摘する、ものを考えるための言葉の「分かりにくさ」について、「そもそも学問・思想の言葉は抽象的であり、それゆえ意味がわかりにくくなるのだ」と言うこともできる。たしかに、考えるための言葉は、個別具体的な事象を抽象化する作用がある。ただしそれらの言葉を翻訳語として受け入れてきた日本語の場合、具体的な日常の言葉と抽象的な学問・思想の言葉の関係が、逆転している可能性があるのだ。まず具体的な日常的意味を持つ言葉が先にあって、しかるのちに一定のものの見方で抽象化し意味を限定して使う、という順番になっていない。限定した意味を、翻訳語として受け止め、いわば完成された意味として受け取ることの多い日本語では、この順序はとかく逆転して理解されがちだ（柳父 1982：78）と柳父は指摘するのである。「私たちは、抽象的思考にとってもっとも基本的な用具である抽象語を、ほとんどすべて、日常語とは別の種類の言葉を宛てて用を足してきた（柳父 1972:45）」のであり、「明治初年以来、私たちは、抽象的思考の概念、つまり、考えるための言葉は、全て出来合いのまま、完成品として受けとめてきた。基本的な概念であればあるほど、日常語の概念とは縁の遠いところで、既に作られていた（柳父 1972：45）」のである。

思考の言葉と日常の言葉が断絶しているという柳父の指摘は、単に、思考の言葉が「外国語」だったために、人々の日々の生活に浸透し難かったということではない。そもそも「言葉」に含まれているものの見方を、自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実に基づいて改めて吟味し、点検し、再考してみる、という思考法自体が浸透してこなかったと考えられるのである。後述するように、たしかに、封建的身分制をこれから脱しようとしている幕末から明治時代にかけての日本語使用人にとっては、societyやindividualなどの言葉に含まれているものの見方に対応する現実を、実際の生活の中に見い出すことは困難であった。翻訳語に含まれたものの見方を、日常生活で見たり聞いたり経験する現実に基づいて吟味しながら、実際の生活を支え動かす言葉に育てていくという作業は、後世に託されたのだと言えるかもしれない。

しかしながら「ことばは、いったんつくり出されると、意味の乏しい言葉としては扱われない。意味は、当然そこにあるはずであるかのごとく扱われる。使っている当人はよく分からなくても、ことばじたいが深遠な意味を本来持っているかのごとくみなされ（柳父 1982：22）」るようになる。このことは、翻訳語が成立した当時のみならず、今日においても、私たち日本

語使用人の「ものを考えるための言葉」の使用法において自明視されている可能性がある。柳父が指摘する「翻訳語に特有の効果」は、思考の言葉と日常の言葉の断絶を、今日においても再生産している可能性があるのである。

3　翻訳語としての「社会」

3-1　society とは何か

この節では、society の翻訳語「社会」の成立事情をふり返りながら、思考の言葉と日常の言葉の断絶が生じるメカニズムについて検討する。

そもそも柳父は、言葉をどのような観点で捉えているのか。この点について、次のように述べられている。「言葉は現実の反映である、と多くの人人は考えている。その通りである。だが、他面また、私たちは、事実というものを、言葉を通して理解する。事実とは、ほとんど常に、言葉の意味や機能に従って構成されている。私たちは、事実というものを、言葉の意味に従って理解する。言葉は事実をつくっている、と言うこともできる。そして、そのようにして理解されたところに従って、私たちは行動し、事実を変え、新しい事実を創りだしていく（柳父 1972：38）」。そして、翻訳語として生み出された日本語の思考の言葉をこのような観点でふり返った時、改めていくつかの問いが提起される。すなわち、はたして「社会（society）」なるものは、日本語使用人である私たちにとってどれほど存在していると言えるのか、「どれほどの実感を伴って、この言葉の意味は、私たちの日常生活を支え、動かしているだろうか（柳父 1972：38）」という問いである。

今日私たちは、society と社会を、一対一対応で機械的に置き換え可能な言葉として扱っている。他方、『翻訳語成立事情』「社会」の章（柳父 1982：1-22）では、society の翻訳がいかに困難であるか実感していた時代の、翻訳者たちの試行錯誤の過程が改めて明らかにされる。かつて society にあたる日本語はなかった。相当する言葉がなかったのは、society に対応するような現実が日本にはなかったからだ。やがて「社会」という訳語が作られ定着したが、society に対応する現実が日本にも存在するようになったわけではなかった。このように指摘されるのである（柳父 1982：3）。

そもそも society という言葉には、(1)「仲間の人々との結びつき、集まり」という狭い範囲の人間関係と、(2)「同じ種類のものどうしの結びつき、集まり（における生活の組織、やり方）」というより広い範囲の人間関係の、二つの意味がある。そして（1）であれ（2）であれ、いずれにしろ、ここで言われる人間関係とは、究極的には individual を単位とする [3]。society の翻訳が困難だったのは、当時とりわけ、(2) の意味を表すのにふさわしい日本語が見出せなかったからである。(1) の狭い範囲の人間関係ならば、当時の日本にも似たような現実を見出すことができた。しかし（2）の、仲間内を超えた広い範囲の人間関係については、それは困難であった。「国」や「藩」という言葉はあったが、そこにおいて人々は「身分」として存在しているのであって「individual」としてではなかった（柳父 1982：6）。この「仲間内を超えた広い範囲を含む、individual を単位とする人間関係」という新しいものの見方を日本語でどう捉えるかが、society の翻訳の中心課題だったのである。

3-2　福沢諭吉の「人間交際」

society の翻訳 [4] をめぐる試行錯誤のうち、柳父がとりわけ詳しく論じているのが、福沢諭吉の翻訳法である。福沢は、society の中身を、当時の日本語の日常の言葉を使って人々に伝えようとした。日々使われている日本語から翻訳語を組み立て、新しい意味を、日常の語感を通して人々に伝えようとしたのである。柳父は福沢を、「私たちの日常の中に現に生きている概念によって考え、考えることによってその概念

を抽象化し、生きた有効な抽象概念をつくり出していた（柳父 1972：52）」極めて稀な思想家として位置づける。福沢はsocietyを「交際」「人間交際」「交（まじわり）」「国」「世人」など様々に訳し分けたが、最も多かったのが「交際」や「人間交際」という訳語であったという。柳父は、福沢のこの「交際」という言葉の使い方に注目する。

柳父によれば、「交際」とは、日本語の中にすでにあった言葉であり、societyにおける（1）の狭い範囲の人間関係の意味をもっていた。福沢は、この「伝来の日本語」の意味から出発し、言葉の使用法を工夫して、新しい意味を作り出そうとした。「人間交際」は、「交際」という言葉から出発した福沢の造語であるという。当時普通の言い方であった「世間の交際」とは異なり、交際の主体が明らかにされていた。このような言葉の使い方は、当時の日本語としてやや抵抗のある語感を伴っていたであろうと、柳父は指摘する（柳父 1982：10）。福沢は、日常の中に生きている「交際」という言葉を使いながらも、使い方を工夫して、この言葉に慣れ親しんできた人々が素通りできないある種の違和感を文章の中に生み出そうとした。「人間交際」という表現に従来の「交際」にはなかった新しい語感を見出した読者が、いったん立ち止まり、この違和感は何なのだろうと考え始める。福沢の翻訳法は、そのような読者の応答を引き出そうとするものであった。

さらに福沢は、当時の読者にとっては一段と抵抗感を伴うような言葉の使い方を開発していった。「家族の交際」「君臣の交際」という言い方である（柳父 1982：10）。「家族」とは、従来、「交際」という言葉と結びつくような言葉ではなかった。「家族」とは、その構成員個人個人の存在の明らかでない全体を指していたからである。改めて「交際」するまでもない、統一体であった。他方「交際」は、それぞれ独立したそれぞれ対等の人間を前提としていた。「家族の交際」は、「家族」の構成員一人一人を独立した人間として可視化し、「交際」の「相手」の存在を明確にした[(5)]。さらに、「君臣の交際」という言い方は、「家族の交際」以上に意味が矛盾していた。君臣の間にあるのは主従関係であって、「それぞれ対等の」という考え方とは相容れなかった。「君臣」は元来、「交際」とは結びつくことができない言葉だったのだ。

しかし、福沢の翻訳法においてはまさにこの矛盾こそが重要なのであった。福沢は、言葉の使い方の矛盾を通じて、「君臣」の意味を変化させるとともに、「交際」という言葉の意味をいっそう抽象化しようとした（柳父 1982：11）。ここで抽象化するとは、従来「世間」という言葉と結びついていた「交際」を、「人間」にも「家族」にも、そして「君臣」にも結びつきうる言葉として使用することである。そのことを通して福沢は、「交際」の意味の範囲を広げ、新しい視野を持った「交際」の展望を、人々に開いてみせたのである（柳父 1982:11）。「交際」には、「人間」という行為の主体がいる。この「人間」は、世間より広い範囲の人々をも含む。「家族」にも、「君臣」にも、「交際」する「人間」がいる。この「人間」は、身分や身内から独立して存在し、それぞれ対等である。読者は、なじみの言葉のこれまでとは異なる結びつき方に抵抗感、違和感を覚える。従来それらの言葉を通して、見たり聞いたり経験したりしてきた現実とずれがあるからである。読者はそこで思考を止める可能性もある。しかしもし読者が福沢の呼びかけに応答し、思考し続けるならば、「交際」が「人間」や「家族」や「君臣」と結びつくことはいかにして可能になるのか、その論理を追求し始めることになるだろう。

柳父が福沢の翻訳法に注目するのは、「日本の現実の中に生きている日本語を用いて、ことば使いの工夫によって、新しい、異質な思想を語ろうとし」、「そのことによって、私たちの日常に生きていることばの意味を変え、またそれを通して、私たちの現実そのものを変えようとした（柳父 1982：37）」点にある。「交際」は、

確かに、「それぞれ独立のそれぞれ対等な人間」という意味をもっていたかもしれない。しかし言葉の使い方を工夫したとはいえ、封建的身分制をこれから脱しようとしている当時の日本語「交際」が作り出しうる現実は、society とのずれも小さくはなかったと考えられる。読者たちは、「目に見えぬ範囲の多数の人々との平等な人間関係（柳父 1982：35）」を、どこまで具体的に捉えることができたであろうか。しかしそれでも福沢は、「交際」という「穏やかなる日本語（柳父 1982:35）」を用いることにこだわった。柳父はここに注目するのである。

福沢の翻訳法で重視されたのは、日常の概念とは縁の遠いところで「完成された意味」「完成品」として扱われるような思考の言葉を作り出すことよりも、いわば「未完成」な日常の言葉を用いてものを考えることであった。翻訳語を「完成品」として扱うとは、例えば、日常の使用と切り離されたところで「交際」に society の厳密な定義を与え、両者を一対一対応に機械的に置き換え可能な言葉として扱うようなやり方である。これに対して福沢の翻訳法は、「交際」という言葉の日常の意味や使用法から出発して、新たなものの見方を創出しようとするものであった。言葉の組み立てを工夫し、これまでにはなかった文脈を作り出し、「交際」という日常の中に生きている言葉の使い方を少しずつ変えていく。福沢は、その言葉を使って実際にものを考えてみせ、読者にもそれを促した。そこでは、「目に見えぬ範囲の多数の人々との平等な人間関係」という新しい現実を、新しい「交際」として、人々の日々の生活の中に具体的に生み出すことが重視されたのである。

実際に「伝来の日本語」を変化させ、新しいものの見方を開いていくためには、society の翻訳者である福沢の側のみならず、福沢の文章に応答する読者の側の試行錯誤も必要になってくる。society は知らないが「交際」は知っている、すその広い読者による、自らの言葉の使用をめぐる試行錯誤である。そして、そのような応答を促そうとする福沢の翻訳語においては、ものを考えるための言葉と日常の言葉を断絶させてはならなかったのだと考えられるのである。

3-3 「人間交際」が可視化する現実

society の意味を理解することは、単に、西欧語に日本語の翻訳語を当てはめることができるようになることではない。そこに含まれている新しいものの見方で、現実を把握できるようになるということだ。福沢は「人間交際（society）」という新しい発想を手に入れた。そしてこの「『交際』を基本にすえてみるとき、日本の現実における『交際』の特徴が明らかに現れてみえて（柳父 1982:11）」きたのである。ただしそれは、society にあたる現実が見えてきたということではなかった。むしろ、society に当たる現実がいまだ存在しないということが、はっきりと認識されたのである。それは日本の「交際」のいたるところに「権力の偏重」が存在するという実態、すなわち、人間関係がことごとく不平等だという現実であった。

福沢は、日本には、権力の偏重があらゆる人間交際の中に浸透していると指摘する。「権力とは、政府と人民の間だけにあるわけでもないし、政府の専制のみを指すのでもない。交際があれば、力が偏らないということがない。仮に、日本国中の交際に天秤をかければ、大きな天秤も小さな天秤もことごとくどちらかに偏る。男女の交際、親子の交際、兄弟の交際、長幼の交際にも権力の偏重がある。家を出て、世間を見ても同じである。師弟主従、貧富貴賤、新参古参、本家末家、いずれもその間に権力の偏重が存在する[(6)]」、と言うのである。

後述するように、この「明らかに現れてみえて」きた日本の現実における「交際」の特徴が、やがて福沢の思考を行き詰まらせ、ついには「人間交際」という概念で society の意味を追求することを断念させることになる。今日の私たち

からすれば、「四民平等」というスローガンさえ唱えられてまだ間もない当時、日本において人間関係にあまねく力の偏りが見えたということは、ある意味、当然のことのように思える。福沢が「権力の偏重」と呼ぶ現実は、それ以前からずっと存在していたはずではないか。なぜ福沢の「人間交際」は「挫折」してしまうのだろうか。

しかし、おそらく「権力の偏重」という「現実」は、society の翻訳語としての「人間交際」というものの見方を習得するまで見えてはいなかったのであり、「問題」として把握することはできなかったのである。「権力の偏重」はたしかに「人間交際（society）」と対立する現実であるが、この現実はむしろ、「人間交際」という言葉との関係において初めて「現実」として成立可能になるのだと考えられるのである。

そもそも、何が「人間交際（society）」かということは、何が「人間交際（society）」ではないかということとの関係によって理解されうることである。「対等な」人間関係がどういうことか知るためには、同時に、「対等ではない」人間関係がどういうことかを知る必要がある。「権力の偏重」と「人間交際（society）」は、コインの裏表の関係にある。福沢は、「人間交際（society）」を理解したからこそ、「権力の偏重」という「現実」を見ることができた。「権力の偏重」という現実は、「人間交際（society）」という言葉を通して理解されたのであり、この言葉を通して作り出されたのである。「人間交際（society）」というものの見方がまず最初に切り開いたのは、「平等な人間関係」それ自体というよりも、「平等か、平等でないか」という軸で人間関係を考えるというそもそもの発想法であったと考えることができるのである[(7)]。

先述したように、福沢は、日常の概念とは縁の遠いところで「完成された意味」「完成品」として扱われるような思考の言葉を作り出すことより、たとえ「未完成」であったとしても日常の言葉を用いてものを考えることを重視した。福沢の思考法は、「そもそも社会とは、それぞれ独立したそれぞれ対等の個人の人間関係のことである」という抽象的な定義を先に置き、そこから「天下って」現実を分析するやり方とは対照的であった。福沢は、「日本の現実の中に生きている日本語を用いて、ことば使いの工夫によって、新しい、異質な思想を語」る、という困難な道を進もうとした。それは、翻訳語を完成した「規範概念」として捉え、「日本にはあるべき○○（社会、個人、近代、自由、市民・・・）がない」とか「日本もあるべき○○に近づいてきた」などと分析する、「翻訳的演繹論理の思考（柳父 1982：40）」を避けるためであった。福沢の翻訳法は、「人間交際（society）」という言葉を通して実際に見えてきた、それ自体新しい現実である「権力の偏重」から出発し、そうではない別の「交際」のあり方やその必要性を一つずつ具体的に考えていこうとする試みだったと考えられるのである[(8)]。

4　翻訳語の「カセット効果」

しかしやがて福沢は、society の翻訳語として、「社会」という翻訳のための全くの新しい造語を使用するようになっていく。柳父はこれを、「日本語による独創的な思考を、一つの限界までつきつめた先覚者の、現実との格闘の末の挫折（柳父 1982：41）」として捉える[(9)]。時代は急激に動いており、一つ一つの言葉について、迷い、立ち止まっている余裕がなくなってきたのである。以後、society という文字を見れば、その意味についてあまり迷うことなく、ほとんど機械的に「社会」という翻訳語をあてて解決したとする時代になっていく（柳父 1982：42）。翻訳語は、「訳字を以って原意を尽くすに足る（柳父 1982：154）」とみなされるようになっていくのである。

「社会」は society のために新しく作られた言葉であるから、たしかに、定義において society とのずれはない。しかし、意味内容が

抽象的で、意味が知識としてしか入ってこない。日常の言葉の中に具体的な用例が乏しいために、意味内容が乏しく、わかりにくい言葉である（柳父 1982：20）。ものを考えるための抽象的な言葉であるが、それに先行する具体的な日常的意味をもつ言葉が存在しない。日常の言葉と切り離されたところですでに完成されている、「勉強部屋」の言葉である。柳父によれば、このことは「社会」に限らず、この時期の翻訳語に共通する特徴である。

「交際」や「人間交際」という日本語で society の意味の追求を試みたものの、実際に見えてくるのは「権力の偏重」という現実であった。society のものの見方と日本の現実とはあまりに遠く、「結局望ましいものは現実に欠けている」としか言いえなくなる。福沢の文章におけるこの思考の行き詰まりと、「社会」という新造語を用い始めた時期の重なりに、柳父は注目する。「社会」という言葉をいくら眺めても、society の意味が理解できるわけではない。しかし少なくとも翻訳者は、「この新しい文字の、いわば向こう側に」society の意味があるのだという約束を置き、それから先はこの未知の言葉に預けることができるようになる。思考の困難に、それ以上踏み込まずに済むようになるのである（柳父 1982：38-40）。

この約束を理解できるのは、原語に直接触れることができる一部の知識人に限られていたかもしれない。しかし「社会」という言葉の語感の新しさ自体は、多くの読者が感じることができた。新しい時代における新しい言葉であるということはそれ自体、その言葉に何か深遠な意味があるように見せる効果がある。意味がよくわからないからこそ、逆に、何か重要な意味があるに違いないと受け止められ、かえって乱用されることがある。柳父はこれを、「カセット効果」と名づける（柳父 1982：36）。

カセット（cassette）とは、小さい箱という語源を持つ。casse は「箱」の意味で、ette は「小さいもの」の意味である。カセット・テープ、カセット・レコーダー、カセット・コンロなどのカセットだが、宝石類を入れる小箱という意味もある。柳父が言う「カセット」とは、この宝石箱の意味である。実際に箱の中に宝石が入っているかどうかはわからない。しかし、何か貴重なものが入っているに違いないと期待させる、入れ物自体の効果である。「社会」などの漢字二字熟語の翻訳語それ自体が物のように実体化され、中身が何かわからなくても、人を魅了し、惹きつける「入れ物」の効果をもつようになると言うのである。今日の日本語の思考の言葉が、他の言葉との具体的な脈絡が欠けていても、抽象的な脈絡のまま使用できるということには、この翻訳語の「カセット効果」が関わっているだろう。

「社会」などの今日の学問・思想の基本用語は、「肯定的な価値を持っており、かつ意味内容は抽象的（柳父 1982：19）」だという語感がある。日常の言葉と切り離され、あらかじめ完成された肯定的かつ抽象的な意味をもつ思考の言葉は、現実に生きている意味というよりは、やがて、具体的な現実を「天下って」分析する「規範概念」にもなっていく。福沢の思考は、「ことばは正しい、誤っているのは現実の方だ」という「翻訳的演繹論理の思考」に、自ら陥ってしまったところで行き詰るのである（柳父 1982：39）。「権力の偏重」という現実を目の当たりにした時、「要するに日本には、いまだ社会や個人という現実が欠けているのだ」という「結論」が導き出され、そこで思考が停止してしまう。それは、「人間交際（society）」という概念が可視化する「権力の偏重」という現実を出発点として、「そもそも対等な人間関係とは？」「そもそも独立した人とは？」と問い直し、society のものの見方と自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実との接点を一つずつ具体的に解き明かしていこうとする思考法とは逆向きの発想である。

柳父は、「完成品として出発した概念は、まず、その言葉の使用者の思考を、『言葉』のところ

で停止させてしまう傾向がある」と指摘する（柳父 1972：45）。あることがらについて、「それはなぜか」「それはいったい何なのか」と問いかけられた問題が、「要するにそれは○○なのだ」と抽象概念一言で答えられ、結末がついてしまう。日々の生活における問いかけをきっかけに動き始めた思考が、学問・思想の基本概念の言葉にたどり着いたところで停止し、結論が与えられたことになってしまうのである。「問いかけた者も、答えた者も、このような種類の言葉に辿り着いたとき、それまで不安定にゆれ動いていた思考を、すべて『言葉』にひき渡し、満足する。あとは『言葉』が引き受けてくれるのである（柳父 1972：46）」。

他方、福沢が経験したような「挫折」は、society という「外来文化」の受け入れに熱心な時代における熱心な人々の間のものである。別の文脈においては、翻訳語の「カセット効果」は、それらの言葉を恐れ嫌うという反応をも引き起こす。実際、「『社会』ということばを使っただけでも危険思想とみなされる時代（柳父 1982：20）」が、やがてやって来るのである。一つの言葉が、要するに良いか悪いかと色づけされ、価値づけされて人々に受け止められること、柳父によれば、これは、日本における翻訳語の重要な特徴の一つである（柳父 1982：46）。「社会」と名のつくものを、考えるよりも前に、それ自体としてあこがれたり恐れたりするのである。「ことばがこうして、いいとか、悪いとか価値づけされて受け止められている、ということは、ことばが、人間の道具として使いこなされているのではなく、逆に、何らかの意味で、ことばが人間を支配している、ということを示している」と柳父は指摘する。「価値づけして見なしている分だけ、人はことばに引きまわされている」のである（柳父 1982：46-47）[(10)]。

言葉を通して現実が構成されるとすれば、思考の言葉のこのような使い方は、文法的な意味での言葉の使用の問題というよりは、現実についての理解の仕方や、現実についての知識の組織化のされ方の問題として再考する必要のある論点であると考えられる。思考の言葉と日常の言葉が断絶しているのは、単に、今日の思考の言葉がもともと「外国語」であるために、人々の日々の生活に浸透するのが難しかったというだけではない。柳父の言う「翻訳的演繹論理の思考」は、日々の生活における問いかけをきっかけに動き始めた思考を、学問・思想の基本概念の言葉にたどり着いたところで停止させてしまう。ものを考えるための抽象的な言葉に含まれたものの見方を、自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実に基づいて改めて吟味し、点検し、再考してみる、という逆向きの思考は妨げられてきたのである。

このような思考の言葉とその使用法は、人々の日々の生活の現実がいかなるものであるかについての知識の社会的組織化に、今日においても埋め込まれている可能性があると考える。私たちはある意味で「思考の言葉」に習熟すればするほど、自らの日々の生活の個別具体的な事象に立ち戻ることもなく、「他人事」として「ものを考える」やり方を身につけていく可能性があるのである。

5　おわりに―思考の言葉と日常の言葉はいかにして接続するのか

柳父の指摘する翻訳語の「カセット効果」は、今日の日本語における思考の言葉の使用法にも組み込まれている可能性がある。私たちは「社会」という言葉を、その意味を改めて吟味することなく使用することができる。「社会」の意味は具体的にどんなものか、それは自分自身の日々の生活の中で見たり聞いたり経験したりしていることとどのように関わっているのか、そもそも原語 society の意味はどんなものかなどと、「宝石箱（カセット）」を開いて一つ一つ中身を吟味したりはしない。「社会」とは何かと尋ねられても、具体的に答えることが難しく、

それ以上言い換えることが困難である。それは、「丸ごと呑み込むか、否か（柳父 1972:27）[11]」の言葉である。他方、それにもかかわらず私たちは、「社会」を意味の乏しい言葉としては扱わない。この言葉には何か立派な意味が含まれているはずだ、言葉自体がその「意味」を語ってくれるはずだと期待して、言葉の「効果」に自らの思考をあずけることができるのである。

例えば社会学の授業は、その受講者にとって、「社会」という言葉を自ら使用する数少ない機会の一つであると考えられる。かれらにとって、「社会」という言葉は、やはり、「世の中」や「世間」とは語感の異なる「勉強部屋」の言葉である。「社会」は、society ＝社会、と一対一対応で置き換えられ記憶される単語であり、そもそもその意味は何かと改めて問うたり、自分で言い換えたりする余地のない、まさに丸ごと呑み込むべき言葉として受け止められている。

仮に、「元来 society は individual と対になる概念であり、社会とは独立した個人の平等な関係のことだ」という定義を知識として学んだとしても、そもそも「独立した（independent）」も「平等な（equal）」も「社会」や「個人」と同様に日常生活において具体的な実感の乏しい、抽象的な翻訳語である。これらの言葉は、例えば、「完全な独立は難しい」「何もかも平等にすれば良いわけではない」「完全に平等な社会が実現するには時間がかかる」など、「完全な」「何もかも」という言葉との結びつきで使用されることが多い。「独立」や「平等」なるものには、何か自分には手に負えない「抽象的」で「立派なものだ」という語感が伴っている[12]。

これは単に知識が不足しているとか、語彙が少ないとかということだけの問題ではないように思われる。本稿のこれまでの議論をふまえるならば、むしろ、抽象的な脈絡のまま「他人事」として「ものを考える」思考法と、そのような思考法を生み出す言葉の使用のし方の問題が背後にあるのではないかと考えるのである。「そういえば、ここで自分の言う『独立』とは具体的にどんなことか」「ここで自分は何からの独立を想定しているのか」「独立について自分が『難しい』と考えていることは具体的に何か」「そもそも自分の日々の生活の中で『平等／不平等』が問題になるときは具体的にどんな時か」などという、思考の言葉を日常の言葉で改めて言い換えたり、日常の言葉で思考の言葉の意味を改めて吟味するような問いが出ること自体がまれなのである[13]。

柳父の議論を社会学的に捉え直せば、思考の言葉を「勉強部屋」限定の言葉として、具体的な意味内容が乏しいまま、日常の言葉と切り離して抽象的に使用し続けているということ自体、興味深い社会現象であると捉えることもできる。柳父の言う「翻訳的演繹論理の思考」も、日本語を使いながら社会的現実を理解し、作り出し、社会についての知識を組織化する一つのやり方であるには違いない。本稿のこれまでの議論をふまえるならば、思考の言葉と日常の言葉の断絶は、それ自体、「社会」についてのどのような「知り方」を組織化するのかという、社会学的探究課題が導出されるであろう。

他方、福沢の翻訳法をめぐる柳父の議論から示唆されるのは、日常の言葉から思考の言葉を吟味し直すという、もう一つ別の「ものの考え方」が必要だということだ。柳父自身は、思考の言葉と日常の言葉の断絶を変更不可能ものとは考えていないようである。「およそ物事は、すっかり意味が分かった後に受け入れられる、とは限らない。とにかく受け入れ、しかる後に、次第にその意味を理解していく、という受け取り方もある、私たちの翻訳語は、端的に言えば、そのような機能をもったことばなのである。有史以来、日本人は、そのようなやり方で、漢字によって異質な文化を受け入れてきたといえる（柳父 1982：190）」と指摘するのである。

とするならば、切り離された二種類の言葉の場をつなぐ、という活動はどのような必然性の中で起こりうるのだろうか。幼い頃から慣れ親しんできた言葉の使い方について「それはいっ

たい何なのか」と改めて考え直すような―日常の言葉と勉強部屋の言葉の間を飛び移るのとばまた別の―試行錯誤を、すその広く日常の言葉の使用者が行い始めることはいかにして可能になるのだろうか。そのこと自体に、様々な困難があるのではないか。思考の言葉と日常の言葉を切り離して成り立ってきた、社会的現実についての理解の仕方や、社会的現実についての知識の組織化のされ方の中に、そのような活動を妨げるような力学が作動しているのではないか。これらのことを、社会学の探究課題として設定することも可能だと考えるのである。

注

(1) 抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉（専門的知識）と具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉（日常的知識）との関係を問い直すことは、1970年代以降の社会学における一つの主要なトピックになっている。本稿の問題意識も、この文脈から導き出されたものである。とりわけ筆者はこれまで、この領域の第一人者の一人であるカナダの社会学者ドロシー・スミスの社会学に注目してきた。スミスの社会学の主題は、「女性の立ち位置（women's standpoint）」、すなわち近代社会において「周辺」化された人々の立ち位置から、「支配的な」知識の成り立ちを解明することである。スミスもまた、思考の言葉と日常の言葉の断絶に着目しており、そのような断絶を生み出す「支配的な」知識の社会的組織化のあり方を批判的に考察するのである。

(2) 柳父は「文字を書くこと」をめぐる力関係について、レビィ・ストロースの議論を引きながら、「共に文字を書き、それを示し合える人々」の間に作られる「民主的意味」と、「もっぱら書きそれを示す人と、自ら書かず示される人」の間で作られる「権力支配的な、階級的意味」の二通りあると指摘する（柳父1982:83-86）。ここで批判的に考察される「翻訳語に特有の効果」は、後者の意味を作り出すと考えられる。

(3) 柳父の議論では、『オックスフォード英和辞典』（OED 1933年）が参照されている。

(4) 幕末から明治時代のはじめにかけて、societyは、例えば、仲間・会（なかま）、組（くみ）、会社（くみあい）、連中（れんちゅう）、連衆（れんしゅ）、社中（しゃちゅう）、交際（こうさい）、合同（いっち）などと訳されていた（柳父1982：4-5）。

(5)「家族」が「交際する」という発想、すなわち家族の構成員をそれぞれ独立したそれぞれ対等の人間として捉えるという発想への違和感は、当時の日本語使用人に限ったことではないと考えられる。日本近代社会のみならず、「独立したindividual（個人）を単位とする平等な人間関係としてのsociety（社会）」というものの見方を生み出した西欧近代社会においても、「家族」は長らく「ひとかたまり」として捉えられてきた。1980年代以降の社会学における「近代家族」という概念は、近代社会における基本単位は、実は、個人ではなく家族であった、ということを問題提起するものであった。例えば、近代家族においては、女性が、妻や母として夫や子供のケアをする無償労働（unpaidwork）に従事することを求められ、経済的に独立できず夫に依存せざるをえない「個人未満」の存在になることは、自明視されてきたのである。

(6)『文明論之概略』の原文は、柳父（1982：11）を参照。

(7) societyというものの見方によって可視化されたのは「不平等」の遍在という現実だった、ということは、近代社会の後発国である日本に特有のことではないと考えられる。フランス革命のいわゆる「人権宣言」（1789年）の原題は、「Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen」であり、「人間およ

び市民のための権利宣言」と訳されるが、「男性および男性市民のための権利宣言」と直訳できる。「人間」と「市民」には実質的に、男性しか含まれていなかったのだ。オランプ・ド・グージュ（Olympe de Gouges）による「女性と女性市民のための権利宣言（Déclaration des Droits de la Femme et de la Citoyenne）」（1791 年） は、society（société）が可視化した男女間の不平等に対する最も初期の異議申し立ての一つである。

(8) 同様の思考の変遷は、individual の翻訳においても並行して進行していった（柳父 1982：23-42）。単なる man でも human でもない individual の特別なものの見方を想起させようと、他の翻訳者たちが「一箇人民」や「一身ノ身持」という「四角張った文字」の翻訳語を考案する中で、福沢は初め、individual の翻訳語として「人」という「穏やかなる日本語」を使用していた。ここでも福沢は、翻訳の文章の中で従来の日本語にはなかったような文脈を作り出しながら、「人」という日本語の意味を微妙に変えていこうとした。例えば、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という有名な文章は、「天」に対して責を負いひとりでいるような「人」という考え方を語り、「人」という言葉にかつてなかったような新しい意味を担わせた。しかし、ちょうど society に「社会」を当てるようになった頃、福沢は「独一個人」という「四角張った文字」から成る翻訳新造語を自ら使用するようになった。やがて「独」と「一」がとれ、「個人」という翻訳新造語が成立したのである。当時の日本に実際にある現実から出発して、individual という新しい人間観を追求しようとする福沢の試みは、ここで挫折したのだと柳父は分析する。

(9) 今日の日本語では、「交際」という言葉は、かろうじて「男女交際」という言い方で限定的に使われている。福沢の議論をふまえるならば、今日の「男女の交際」は果たして、それぞれ独立したそれぞれ対等な人間関係を指向しているだろうか、と問い直すこともできるであろう。

(10)「社会」は翻訳のための新造語であるが、「自由」など、日本語としての歴史を持ち日常語の中にも生きてきた言葉で、同時に翻訳語として新しい意味を与えられた言葉の場合は、事情はさらに複雑になる（柳父 1982：173-191）。自由には、漢籍由来の伝来の意味「わがまま勝手」という意味と、freedom や liberty の翻訳語としての意味が共存している。この矛盾した意味の共存が、「自由を履き違える」という言い方を可能にする。「自由」という言葉は、「正しく」理解されれば良い意味であり、「はき違え」て理解されれば悪い意味になるということである。この場合「良い意味」は freedom や liberty のことであり、「悪い意味」はわがまま勝手のことである。英語では、selfish と、freedom や liberty は別の言葉であり端的に異なる。それらは「はき違え」ようもなく、「それは selfish であって、freedom や liberty ではない」と言える。しかし日本語の中では、「わがまま勝手」とは別の文脈から出てきた freedom や liberty が、同じ「自由」という言葉の中で共存可能になっているのである。日本語の日常に浸透している「わがまま勝手（自由）」は、否定的な価値を持っているが、意味内容が具体的である。その一方で、「自由権」という文脈で使われるような「freedom、liberty（自由）」は、肯定的な価値を持っているが、意味内容は抽象的である。「自由」をめぐって「いい意味／悪い意味」の線引きが、いつ、どこで、だれによって、どのようになされているかを、このような翻訳語の特徴をふまえて改めて考える必要もあるだろう。

(11) この点については、清水（1959：161-189）も参照。柳父は清水（1959）の議論を参照しながら、1960 年代の学生運動を、日

常の言葉と思考の言葉の断絶という観点から再考する（柳父 1972：1-27）。日常の言葉と切り離された思考の言葉は、それ自体で完結した、日常語とは異質の言葉の世界である。運動に参加した若者たちは、理解できない言葉を理解できないまま丸ごと呑み込み、日常の言葉の世界と思考の言葉の世界を「目をつぶって一思いに飛」んでいったのだと柳父は指摘する。

かれらは、日常の言葉である「世間」や「世の中」を捨て、翻訳語「社会」という言葉で読み、書き、語った。日々の生活において「世間」や「世の中」の現実に対して抱いた違和感や反発や疑問、それをきっかけに動き始めた思考の不安定さや揺れ動きは、思考の言葉の世界へ「一思いに飛」び、規範概念化した翻訳語「社会」を得ることで解消された。「あるべき」社会の欠如という結論が与えられたのである。「社会」という異質の言葉それ自体に、かれらを惹きつけ、熱中させる「魅力」があったのだと柳父は指摘する。かれらは、互いに熱心に語り合い、共感しあったが、この共感は、「社会」という言葉の共通の「意味」が伝達されたことによって生み出されたわけではない。それは、むしろ言葉自体の共通の「感覚」、すなわち、意味がよくわからないからこそ逆に何か重要な意味があるに違いないと受けとめる、翻訳語の「カセット効果」によって生み出された共感であった。

柳父によれば、このような種類の言葉は本質的に意志の伝達を妨げるのであり、この種の共感はいったん崩れると取り戻す術がない（柳父 1972：25）。ある時、自分の言葉が相手にいっこうに通じていないことに気がつく。しかし翻訳語「社会」は、丸ごと呑み込むか否かの言葉である。手持ちの言葉は乏しく、「社会」を説明し、言い換えることができない。「カセット効果」が維持できなくなり、共感が崩れ、やがて、自分が追い続けてきた言葉の無意味さに気がつくことになる。そして今度は、この「社会」という言葉に反発するようになるのである（柳父 1972：27）。

学生運動に参加した若者たちの多くは、挫折し、失望していくが、それは何よりも、現実の実態の捉えがたい「社会」への失望だと柳父は言う。「社会とは一体どこにあるのだろう」と行き詰ったかれらは、今度は「社会」という言葉の世界を捨て、「世間」や「世の中」という言葉の世界へ飛び移る。丸ごと飲み込んだ言葉を、今度は丸ごと吐き出し、何もかもなかったことにして、思考の言葉の世界から日常の言葉の世界に戻っていくのである。

柳父が指摘するこうした「挫折」は、あくまで、翻訳語「社会」に魅せられた側のものである。翻訳語「社会」が誕生して間もない頃から存在する、この言葉のもう一つの「カセット効果」、すなわち、「意味がよくわからないが、何か重要な意味があるに違いない」と受け止められるからこそ逆に、この言葉を嫌い、恐れ、危険視するという逆向きの反応も、同時に起きていたと考えられる。翻訳語めぐるこの逆向きの「カセット効果」は、例えば、思考の言葉に飛び移ることそれ自体を拒否し、日常の言葉やその現実にとどまり続けるという反応を引き起こすであろう。あるいは、「社会」とは別種の「あるべきもの」を追求する別の思考の世界に「目をつぶって一思いに飛」ぶという反応も、引き起こしうるのではないかと考えるのである。

(12) あるいは、「社会」をめぐる議論は、しばしば、抽象的に「良い」「悪い」「メリット」「デメリット」を論ずるという方向に進みがちである。

(13) 逆にいえば、そのような問いを促すことが、「社会」についての理解を深める一つの方法になると考える。

参考文献

清水幾太郎（1959）『論文の書き方』岩波新書
柳父章（1972）『翻訳語の論理―言語にみる日本文化の構造』法政大学出版局
柳父章（1982）『翻訳語成立事情』岩波新書